

游_二今瀧山_一記(二)

令和二年六月四日(担当 和夫 義隆 加代子)

原文

嗟乎余自_二去年歸_一山陰、荒涼寂寞、無_二意可_レ慰、而山水又非_二平安之秀麗、而所_レ從多非_二其人、是以游亦不_二甚樂、如_二今日之游、相從者皆故舊門生、絶無_二俗韻、而風景佳勝、亦平安之所_二希見、則游始奇、意始暢、平生亡聊不平之念、一時消釋、淡然自適、將_二與_二神仙爲_レ徒矣、
天保甲辰重九、草庵子記、

読み

嗟_あ乎_あ余_あ去年_{こぞ}山陰_{さんいん}に帰_{かえ}つて自_{より}、荒涼_{せきりやう}寂寞_{じやく}として意_い慰_むること無し。而_{しか}して山水_{さんすい}又_{また}平安_{へいあん}の秀麗_{しゅうれい}に非_{あら}ずして、而_{しか}して從_{したが}う所の多_{おほ}きは其人_{そのひと}に非_{あら}ず、是_{こゝ}れ以_{もつ}て游_{あそ}ぶも亦_{また}甚_{こゝろ}だ樂_{たの}しからず。
今日の游_{あそ}の如_{ごと}く相從_{さうじやう}う者は皆_{みな}故舊_{こきやう}門生_{もんせい}、絶_{たえ}て俗韻_{しやくうん}無し、而_{しか}して風景_{ふうけい}佳勝_{けいさつ}、亦_{また}平安_{へいあん}の希_{まれ}に見_みる所_{ところ}、則_{すなは}ち游_{あそ}は始_{はじ}めて奇_き、意_いは始_{はじ}めて暢_{のびやか}、平生_{へいぜい}亡_な聊_{りやう}不平_{ふへい}の念_{ねん}、一時_{いちじ}に消_{しょう}釋_{じやく}、淡_{たん}然_{ぜん}自_{より}適_{てき}、將_{まさ}に神仙_{しやうせん}と徒_たを爲_なさんとすなり。
天保甲辰重九、草庵子記、

訳

ああ、私は昨年山陰に帰って、心は荒れ淋しさはつのも、気持ちに慰められることはなかった。山や川も心の落ち着く美しいものではなく、付き従う多くの人は、そもそもそういう人ではない。こういうことで、游行はまた楽しいことではなかった。
今日の游行は、相い従う者はみな友人や塾生で、日常の煩わしさは少しもなく、風景はすばらしく、また、このように心の落ち着くことはめったにないことだ。それで游行は初めて興味あることとなり、心は初めて伸びやかになる。普段の寂しい思いや不平の思いは一時に消えて無くなった。あつさりとのびのびとして、まさに仙人の仲間になったようだ。天保十五(弘化元)年九月九日、草庵(32歳)記、

言葉・註

寂寞_{せきぱく} せきばく。さびしいさま。秀麗_{しゅうれい} 立派で美しいこと。所從_{しよじゅう} ショジュウ 心の向かうところ。気の向くまま。②付き従うもの。其_{その} ②「それ」と読み、㊦感嘆・強調などの語気を示す。▽述部_{じよぶ}に用いる。④「そもそも」「なんと」と訳す。反語・感嘆を強調する意。故舊_{こきやう} 故旧、古くからの友人。絶_{たえ} タエテ 俗韻_{しやくうん} 世間の卑し趣。希_{まれ} マレニ 奇_き キ キトス めずらしい。始_{はじ} ハジメテ 暢_{のびやか} ノビル ノビヤカ 亡_な 聊_{りやう} 何となく寂しい。消_{しょう} 釋_{じやく} 消釈、消えて亡くなること。淡_{たん} 然_{ぜん} あつさりしている。自_{より} 適_{てき} 束縛を受けず心のおもむくままに伸び伸びと楽しむこと。徒_た ともがら、門下の弟子。神仙_{しやうせん} シンセン 人間界を離れ不老不死の生活にはいった人。仙人センニン。徒_た ト 弟子 天保甲辰 天保15年 草庵32才